

日本海海戦

一 連合艦隊待機点に係る考察から導く教訓 一

夏井 隆

はじめに

「長官は、バルチック艦隊がどの海峡を通過して来るとお思いですか」ということであった。小柄な東郷はすわったまま島村の顔をふしぎそうにみている。質問の背景を考えていたのかもしれない、それともこのたびきり寡黙な軍人は、打てばひびくような応答というものを個人的習慣としてもっていなかったせいであるかもしれない。やがて口をひらき、「それは対馬海峡よ」と、言い切った。東郷が、世界の戦史に不動の位置を占めるにいたるのはこの一言によってであるかもしれない。

上記は、明治日本を描いた歴史小説『坂の上の雲』の一節である。日露戦争においては、政治、軍事を問わず、国家レベルでいくつかの重要な決心点²が存在するが、その中でも「バルチック艦隊をどこで迎え撃つのか」という決心は、その後の史実を踏まえれば、日本海軍／連合艦隊レベルではなく、日本という国家レベルでも極めて重大な決心点であった。

連合艦隊としては、バルチック艦隊が「対馬海峡」を選択する、と評価して鎮海湾で待機していたが、その評価に至る明確な理由を史実から見出すことはできない。海軍軍令部編『極秘 明治三十七八年海戦史』においても、「東郷司令長官は、三十日第二艦隊司令長官海軍中將上村彦之丞及び幕僚を率いて入京し、海軍大臣、軍令部長等と共に計策せるの結果、先づ全力を鎮海湾に置き、以て敵の第二太平洋艦隊の行動を監視し、機に応じて動作することに決定せり」³と決定事項のみ記録されており、「なぜ鎮海湾なのか」の理由については記載がない。

¹ 司馬遼太郎『坂の上の雲(7)』文春文庫、1999年、321頁。

² 分岐策や事後策の選択肢の決定と発動を決心する時期

³ 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第1章 大本營の動作」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C05110083300『極秘 明治37.8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』(防衛省防衛研究所)7頁。

※原文は「漢字カタカナ」表記であるが、本稿では「漢字ひらがな」で原文をそのまま表記する。

連合艦隊の待機点に係る先行研究の一つとして、倉谷昌伺「日本海海戦を科学する」(海幹校戦略研究(2011年5月))が存在し、ゲーム理論を用いた科学的分析によって、倉谷は「我は「鎮海湾」を0.33の確率で、「陸奥湾」を0.67の確率で選ぶのが最適戦略」「総合的に考え、5月24日以前の比較的早い時期から、連合艦隊は鎮海湾よりも東側の待機位置(津軽海峡方面)に近い海域に待機位置を移すのが適当」と導き出している。では、作戦立案に係る手順で分析した場合、「連合艦隊の待機点は、鎮海湾の他には考えられなかったのか」、という疑問が本稿を書き始めた端緒である。

本稿は、日本海海戦における連合艦隊の待機点に係る考察を行い、作戦立案に係る教訓を導き出すことを眼目とし、まず、連合艦隊にとっての日本海海戦の位置づけを整理する。次に、連合艦隊(司令長官)の使命⁴を明確にした上で、連合艦隊視座からの待機点を考察、加えて、軍令部の作戦構想等を踏まえつつ、考察結果に基づく教訓等を導出することとする。

なお、紙面の関係から、彼我の兵力や史実で広く周知されている要素については本稿では省略する。また、諸説ある中で、考察の軸は公式な記録書である『極秘 明治三十七八年海戦史』に置くこととし、本稿での分析手順は米軍「JPP」⁵の考えを準用するとともに、使用する用語等は、読者の理解を容易にするため公開された資料に基づき解説を加えている堂下哲郎『作戦司令部の意思決定』(並木書房 2018年)から引用する。

1 連合艦隊にとっての「日本海海戦」

(1) 上級指揮官からの指示

連合艦隊の実質的な上級司令部(指揮官)に該当する軍令部(長)⁶からの指示は、以下の「帝国海軍第二期作戦方針」に明確に示されている⁷。

⁴ Mission: 目的と任務からなり、とるべき行動とその理由が明確に定義されたもの。

⁵ Joint Planning Process: 使命を分析し、複数の行動方針案を作戦、分析、比較し、最善の行動方針を選定し、計画と命令を作成するための7つの論理的ステップからなるプロセス。

⁶ 連合艦隊は天皇直轄部隊である。軍令部長は戦時、大本営において海軍統帥に関し天皇を輔弼、連合艦隊への命令は軍令部で起案、天皇の裁可を受け天皇の名で発せられる(大海令等)。以上を考慮すると、海軍作戦の実質的な最高責任者は軍令部長であり、連合艦隊の実質的な上級指揮官である。

⁷ 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備/第1章 大本営の動作」JACAR(アジア歴史資料センター) Ref.C05110083300『極秘 明治37.8年海戦史第2部 戦紀 巻1』(防衛省防衛研究所)12頁。

【帝国海軍第二期作戦方針】

1 敵情

(略)

2 作戦の目的

一、東洋の海上権を確実に保持するは戦争終局の目的を達成する至大の関係を有す 而て海上権を保持せんかためには 先づ敵艦隊の主力を撃破すること絶対に必要なり 故に我が海軍作戦の目的は依然敵艦隊の殲滅を以て主眼とす

3 作戦の方針及び施設

一、海軍の主力は敵艦隊の北上するを待ち作戦せんとす
(略)

つまり、「海軍主力(連合艦隊)は、敵艦隊(バルチック艦隊)の北上を待って会敵、敵艦隊を殲滅する」ことが、連合艦隊に対する軍令部(長)からの指示であるが、ここで注目すべきは、作戦目的の中で「殲滅」という激しい言葉が使用されていることである。

まとまった艦隊をウラジオストックに逃してしまつては、その後の日本海、朝鮮海峡の通航が妨害され、日本側の大陸への補給が妨げられる。その間、ロシア陸軍はどんどん増強されるから、形勢は一方向的に我が方に不利になる⁸。また、日本のシーレーンは壊滅し、満州の日本陸軍は後方を断たれて孤立し、日本の国民生活と国内産業が崩壊して、日露戦争が日本の敗戦に終わったことは確実である⁹。

このため、連合艦隊としては「一隻たりともバルチック艦隊をウラジオストックに入港させてはならない」、すなわちバルチック艦隊を「殲滅」する必要がある、軍令部(長)から連合艦隊(司令長官)には、完全勝利以外では果たすことのできない¹⁰、極めて重い指示が与えられていた。

⁸ 岡崎久彦『小村寿太郎とその時代』PHP文庫、2003年、318頁。

⁹ 野村寛『海戦史に学ぶ』祥伝社新書、2014年、100頁。

¹⁰ 戸高一成『日本海軍戦史』角川新書、2021年、123頁。

(2)作戦環境¹¹

連合艦隊レベルの階層では、作戦環境として「現在の状態」「私のエンドステイト¹²」「敵のエンドステイト」を分析、理解しておく必要がある。

まず、日本国家として「現在の状態」を考えた場合、奉天会戦で日本陸軍はロシア軍を撃破したとはいえ、その勝利は決定的というには、はるかに遠く¹³、もはや日本には戦争を継続する余力なく、早期講和が望まれている状態にあった。他方で、ロシア側には講和に応じる空気は全くなかった。バルチック艦隊を太平洋に回航しつつあり、日本艦隊を撃破し制海権を奪えば、満州の日本軍への補給が遮断でき、勝利の女神がロシア軍に微笑むと期待していたからである¹⁴。このため日本としては、まさに日本海海戦の勝利、かつロシアの意気を消沈させ得るほどの完勝をもってロシア側を講和に持ち込む必要があった。

連合艦隊としての「現在の状態」は、ロシア海軍の極東における根拠地の一つである「旅順」を攻略し、ロシア旅順艦隊は壊滅させているものの、もう一つの根拠地である「ウラジオストック」及び同根拠地を拠点とする一部のロシア艦艇は健在であり、日本海海戦前の明治 28 年 5 月 5 日 ウラジオストックを出航したロシア海軍水雷艇 4 隻が北海道後志持田崎付近に現れ、日本商船が被害を受ける事象も生起している¹⁵。

彼我の状態については、連合艦隊としてはロシア旅順艦隊との戦闘以降、十分な船体整備や訓練期間を確保し、バルチック艦隊を迎撃する十分な準備を実施しているのに対し、バルチック艦隊は歴史上類をみない困難な大航海を実施しており、十分な船体整備も訓練もなし得ず、両艦隊の乗組員の士気については、大きな差があったと推察する。

次に、実質的な上級司令部である軍令部からの指示を踏まれば、連合艦隊としての「エンドステイト」は、バルチック艦隊が殲滅されていることであり、一隻たりともウラジオストックに入港させないことである。また、この結果として、東洋の海上権を確実に保持することにある。これに対し、ロシアとしての「エンドステイト」は、ウラジオストックを艦隊の根拠地として、日本側の海上交通に脅威を与え続けることであり、このた

¹¹ 部隊運用と指揮官の判断に影響を与え得るさまざまな条件

¹² End State : 作戦におけるすべての軍事目標が達成された状態

¹³ 千早正隆『海軍経営者 山本権兵衛』プレジデント社、2009 年、189 頁。

¹⁴ 平間洋一『日露戦争が変えた世界史』芙蓉書房出版、2004 年、68 頁。

¹⁵ 「第 1 編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第 1 章 大本営の動作」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C05110083300『極秘 明治 37. 8 年海戦史 第 2 部 戦紀 巻 1』(防衛省防衛研究所) 20 頁。

めバルチック艦隊としては、まずは「ウラジオストックにたどり着く」ことが「エンドステイト」になる。

仮にウラジオストックにロシア艦隊の一部でも入港すれば、日本近海のシーレーンは常にロシアに脅かされ、中国大陸への食糧・軍備補給路が寸断されて日本軍は壊滅的な損害を被ることが予測されており¹⁶、ロシア側の目的は十分に達成できるのである。バルチック艦隊司令長官ロジェストヴェンスキー中将は、「自身の率いる艦隊からわずか二十隻でもウラジオストックに達すれば、日本軍の交通線に多大な脅威を与えられる」と述べていたと推察されていた¹⁷。

(3) 作戦計画立案上の問題

連合艦隊とほぼ同程度の兵力で編成されるバルチック艦隊を殲滅し、一隻たりともウラジオストックに入港させないという連合艦隊としてのエンドステイトを達成するには、まずは航路不明なバルチック艦隊と確実に会敵することが必須条件となる。会敵そのものをなし得なければ、ウラジオストックに無傷のバルチック艦隊を入港させることになり、以後の連合艦隊の行動、さらに言えば、日露戦争の以後の推移に大きな影響を与えることになるのは必然である。加えて、連合艦隊には、バルチック艦隊の「殲滅」という極めて重い指示が軍令部から課せられている。

しかしながら、五十隻にもなる大艦隊を一回の海戦のみで殲滅させることは極めて困難であり、バルチック艦隊を殲滅するには、会敵位置からウラジオストックまでに十分な空間（幾度かの海戦が実施できるウラジオストックまでの距離）が必要になる。つまり、連合艦隊としてエンドステイトを達成するには、ウラジオストックまでの間に十分な空間を確保できる位置で、バルチック艦隊と会敵することが必須であった。

このような諸条件の中、バルチック艦隊がウラジオストックに入港するための航路としては3つ（対馬海峡、津軽海峡、宗谷海峡）が存在し、どの海峡をバルチック艦隊が通過するのかが全く不明という大きな問題を連合艦隊は抱えていたのである。

¹⁶ 野村寛『日本海海戦の真実』吉川弘文館、2016年、10頁。

¹⁷ アルフレッド・T・マハン『マハン海軍戦略』井伊順彦訳、中央公論新社、2005年、361頁。

(4) 作戦の全体像

「バルチック艦隊を殲滅し、東洋の海上権を確実に保持する」ために、まずはバルチック艦隊と確実に会敵、しかもウラジオストックまでに十分な空間が確保し得る位置で会敵し、その上で、バルチック艦隊の殲滅に至る徹底的な攻撃を実施する、というのが連合艦隊としての作戦構想、すなわち作戦の全体像である。

この作戦を時系列で整理すれば、「バルチック艦隊の航路見積（待機点決定）」 → 「哨戒（索敵）」 → 「会敵」 → 「戦闘」 → 「追撃（殲滅）」の流れになり、連合艦隊は「哨戒（索敵）」から「追撃（殲滅）」に至る各段階で、周到な計画を立案し、そして実際にこれを実行した。

例えば、「哨戒（索敵）」については、およそ動員できる艦艇という艦艇をすべて佐世保に集結させ、決戦兵力五十二隻以外に七十三隻を動員して密度の濃い哨戒網を張った¹⁸。また「追撃（殲滅）」についても、連合艦隊司令部作戦参謀の秋山真之（以下、「秋山」）が立案したとされる「七段構え」はよく知られているが、五島列島からウラジオストックまで六百海里。それを七段に分け、四日三晩ぶっとおし、息もつかせぬ昼戦、夜戦の連続をしかけ、一艦一艇をもあまさず全滅させようとする¹⁹徹底した追撃戦を計画していた。

2 連合艦隊（司令長官）の使命

(1) 実質的な上級部隊（指揮官）たる軍令部（長）の使命と意図

前項で記載した「帝国海軍第二期作戦方針」の「作戦目的」から、軍令部（長）の使命は、「東洋の海上権を確実に保持するため、敵艦隊の主力を撃破する」と導き出せる。また、指揮官の「意図」は作戦方針でもあるが、これも「帝国海軍第二期作戦方針」から、「海軍主力は敵艦隊の北上するを待ち作戦せんとす」、すなわち、連合艦隊をある地点で待機させ、バルチック艦隊の北上を待つて戦闘を実施させることが軍令部（長）の意図であった。

¹⁸ 池田清『海軍と日本』中公新書、1981年、16頁。

¹⁹ 吉田俊雄『連合艦隊の栄光と悲劇』PHP文庫、2000年、148頁。

(2) リスク評価²⁰

連合艦隊（司令長官）の使命を考察する上で、使命に対するリスクは何なのか、を明確にしておく必要があるが、対馬海峡、津軽海峡及び宗谷海峡の3つの海峡のうち、バルチック艦隊がどの海峡を通過してウラジオストックに向かうのか、が全く不明である問題に起因する以下のリスクが考えられる。

ア バルチック艦隊が連合艦隊の待機点から離れた航路（海峡）を選択

バルチック艦隊が連合艦隊の待機点から離れた航路（海峡）を選択し、連合艦隊のいわゆる「出だし」が遅れた場合、連合艦隊はバルチック艦隊と会敵をなし得ず、結果、バルチック艦隊の殲滅も不可能であることから影響度は「大」である。

しかしながら、バルチック艦隊の側にしても、連合艦隊がどの地点で待機しているかの情報は得ていないと推定され、意図的にこれをなし得ることは困難であることから、このような状況が生起する蓋然性は「中」と見積もる。

イ バルチック艦隊が兵力を分散 複数方面から日本海への進入を選択

バルチック艦隊が兵力を分散し、複数方面から日本海へ進入することを選択した場合、連合艦隊としても兵力を分散してこれに対応するか、1方面に対応した後に、他方面に新たに対応するか、という選択が必要になる。また、分散したある一方のバルチック艦隊が、連合艦隊の待機点から離れた航路（海峡）を選択した場合、当該方面に連合艦隊が対応できない可能性もある。この結果、会敵もなし得ない方面があり、殲滅も不可能であることから影響度は「大」である。

また、長途の航海を経て一刻も早くウラジオストックに入港することを欲しているバルチック艦隊にとって、かつ、いわゆる「脚の速い」艦と「脚の遅い」艦が混在したバルチック艦隊にとって、連合艦隊側の対応を混乱させるという意味合いからも艦隊を艦の特性に応じ分散し、それぞれが別方面から日本海へ進入することは十分に考えられ、蓋然性は「高」と見積もる。

²⁰ 計画作業のプロセスにおいて、使命の達成を阻害しそうな障害や行動が明らかになったら、それぞれの蓋然性と影響度を評価し、必要な場合は回避策や軽減策をとる。

(3) 使命等

ここまでの考察から、連合艦隊（司令長官）の使命等を以下のとおり整理する。

まず、「作戦目的 (Purpose)」は、『東洋の海上権を確実に保持するため、バルチック艦隊を殲滅すること』であり、その「手段 (Method)」としては、『バルチック艦隊と、ウラジオストックまでに十分な空間が確保し得る位置で確実に会敵することが作戦成功の必須要件であり、これがためにバルチック艦隊の航路を適切に見積り、適切な位置で待機し、所要の哨戒（索敵）を実施し、会敵後は殲滅に至るまで徹底した攻撃を実施する』ことである。

また、連合艦隊（司令長官）としての「エンドステイト (End State)」は、『バルチック艦隊を殲滅し、一隻もウラジオストックに入港していないこと』であり、「使命」は、『連合艦隊は、東洋の海上権を確実に保持するため、バルチック艦隊の北上するを待ち同艦隊を殲滅する』と導き出す。

(4) 指揮官の意図

前記した「作戦目的」「手段」「エンドステイト」とともに、以後の考察に資するために、作戦計画立案における指揮官の意図を次のとおりとする。

ア 待機において、連合艦隊の兵力は分散せず（待機点は1箇所）

連合艦隊とバルチック艦隊の兵力はほぼ五角である。その中で、連合艦隊が兵力を分散して待ち受けた場合、バルチック艦隊が分散せずに「かたまつて」連合艦隊と会敵する可能性もある。その際は、分散待機した連合艦隊は、兵力大のバルチック艦隊と戦わざるを得ず、殲滅はおろか、勝利はほぼ見込めないことから、連合艦隊としては兵力を分散待機させるという選択肢はない。

イ 損耗率

日本側は、自分の側の艦隊はすりつぶしてもよい覚悟であったと言われるが²¹、連合艦隊として許容する危険度は、バルチック艦隊を殲滅させ得れば、損耗率が甚大でも構わない。軍令部（長）の使命と意図、そして連合艦隊（司令長官）自身の使命を踏まえれば、連合艦隊としてはこの海戦に全てを賭けなければならなかったのである。

ウ 対抗分析で採用する行動方針 (COA²²) (案)

²¹ 岡崎『小村寿太郎とその時代』318頁。

²² Course of Action (COA)：行動方針。

ウラジオストックまでの間に十分な空間を確保できる位置で、バルチック艦隊と会敵することが必須であり、この必須要件を満たす COA のみで対抗分析を行うべきであるが、「待機位置」を考察するという観点から、まずは地理的に考え得る待機位置を全て含ませた COA を仮置きする。そして、その COA の中から、待機が長期に及ぶ可能性を考慮し、軍令部との通信、補給休養、訓練環境を含む後方面の能力を有する COA 選択し、対抗分析で採用する。

エ 検討すべき行動方針等

(ア) 立案すべき我が行動方針 (COA)

「バルチック艦隊の北上するを」どこで待つのか、という待機点が、連合艦隊の COA の根幹である。このため、物理的にバルチック艦隊が採り得る選択肢である「宗谷海峡」「津軽海峡」(津軽海峡西口)及び「対馬海峡」(鎮海湾)の3つと、これに加えて、「最も安全に近いのは、主力艦隊を能登半島沖に集結し、済州島と、津軽および宗谷に監哨を厳にして、敵艦発見の報告と同時に、その方面に急航すること」²³とも言われていることから、宗谷、津軽、対馬海峡のいずれにも対応し得る可能性がある能登半島沖を「中間点」とし、これを待機点とする4つが連合艦隊の COA (案)として考えられる。

その4つの中で、津軽海峡西口、鎮海湾及び中間点ともに大湊、佐世保及び舞鶴の要港部及び鎮守府に近く、一工夫の要²⁴はあるものの、軍令部との通信や、後方面の要件は満たし得ると評価する一方で、宗谷海峡は待機点として後方面が十分ではなく、この段階で私の COA から除外することが妥当である。

COA1: 鎮海湾を待機点とする。

COA2: 津軽海峡西口を待機点とする。

COA3: 中間点を待機点とする。

²³ 伊藤正徳『大海軍を想う』光人社NF文庫、2002年、143頁。

²⁴ 「「三笠」一艦のみが艦隊主力とは別に鎮海湾奥に碇泊していたのは、「毫中丸」を有線通信の端末局として利用し、東京の軍令部など外部と有線のみで、迅速に通信連絡できる利便性を考慮したうえのことである。」伊藤和雄『まさにNCWであった日本海海戦』光人社、2011年、76頁。

(イ) 対抗させる敵の行動方針 (ECO²⁵)

時の米国大統領ルーズヴェルトは日本の敗北を案じ、金子堅太郎に失礼かもしれないが、海軍次官をした経験からの忠告までにと、「バルチック艦隊の航路は対馬海峡から日本海に入るか、津軽海峡を通過するかの二つに一つである。」²⁶と話したといわれるが、物理的には、バルチック艦隊が採り得る選択肢は「宗谷海峡」「津軽海峡」及び「対馬海峡」の 3 つが存在する。

当時のバルチック艦隊内の雰囲気は、「対馬海峡がいいという者が一番少なかった」とされ、「ロジェストヴェンスキーは、宗谷海峡か津軽海峡を選ぶに相違ない」という意見が多かったと言われているが²⁷、3 つの海峡を比較すると次のとおりであり、「対馬海峡」を選択する可能性が最も高い (MLCOA²⁸) と見積もることができる。

「津軽海峡」は航程が長く、逆流も速く太平洋側から進入すれば通過するのに少なくとも 10 時間はかかり²⁹、海峡そのものが大艦隊の作戦行動には適さない。他方で「対馬海峡」は、大艦隊でも十分な距離をおける幅をもち、しかもウラジオストックに最短距離で航行できる。長期間の行動で疲れ切ったバルチック艦隊の乗員の士気や石炭補給の困難さを考えれば、やはりこのコースしかないと誰もが考える³⁰はずである。

「宗谷海峡」については非常に霧が深く、暗礁も多いために、当時の航海術を考慮しても大艦隊の航行には不適であるとともに、ウラジオストックまではあまりにも回り道になり、何よりも途上の石炭 (燃料) 欠乏が確実に予想される。このため、バルチック艦隊が選択する可能性はほぼなく、対抗させる敵の行動方針としては、この時点で除外する。

この段階で、バルチック艦隊の ECOA は「津軽海峡」及び「対馬海峡」の 2 つになるが、これに加えて、連合艦隊にとっては最も危険と考えられる選択肢 (MDCOA³¹) が存在する。それは、前記リスク評価でも述べた「バルチック艦隊が兵力を分散し、複数の海峡を同時に通峡する」という選択肢である。

²⁵ Enemy Course Of Action (ECO) : 敵の行動方針。

²⁶ 平間『日露戦争が変えた世界史』70 頁。

²⁷ ノボコフ・プリボイ『ツシマ (上) バルチック艦隊遠征』上脇進訳、原書房、2009 年、354 頁。

²⁸ Most Likely Course Of Action 最も蓋然性の高い敵の行動方針

²⁹ 野村『日本海海戦の真実』72 頁。

³⁰ 同上、73 頁。

³¹ Most Dangerous Course Of Action (MDCOA) : 最も危険な敵の行動方針。

バルチック艦隊が兵力を分散する可能性があることは、連合艦隊も見積もりを立てていた。『極秘 明治三十七八年海戦史』にも、「日本海に入らんとするに当たりては、先づ速力及び航続力の異なる仮装巡洋艦等を急派して一方に伴動せしめ、主力を纏めて他方を通過するか、或いは主力の一方に出現せし後、仮装巡洋艦に他方を通過せしむること等あるべきを慮り」³²と記録されている。また、バルチック艦隊も実際に、明治28年5月22日には「仮装巡洋艦「テレーク」同「クバーニ」をして、我が東海岸方面に航行」させている³³、これは、バルチック艦隊の対馬海峡通過を秘し、連合艦隊を牽制するための陽動作戦であったと³⁴言われる。

以上のことから、対抗させる敵の行動方針については、以下の3つとする。

ECO A1：対馬海峡を通過

ECO A2：津軽海峡を通過

ECO A3：兵力を2分し、対馬／津軽海峡を通過

3 連合艦隊視座から考察する「待機点」

(1) 行動方針分析・比較の評価基準

行動方針(どの位置を待機点とするか)の分析・比較に際し、連合艦隊としては「確実に会敵」、その会敵位置は「バルチック艦隊と、ウラジオストクまでに十分な空間が確保し得る位置」であることが作戦成功の必須要件であることから、評価基準を次の2つとする。

ア バルチック艦隊と会敵できるか否か

イ 会敵後、殲滅までの十分な空間を確保できるか否か

³² 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第1章 大本營の動作」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C05110083300『極秘 明治37.8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』(防衛省防衛研究所)16頁。

³³ 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第7章 露国増遣艦隊東航始末」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C05110083900『極秘 明治37.8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』(防衛省防衛研究所)363頁。

³⁴ 野村『海戦史に学ぶ』120頁。

(2)対抗分析

COA1～COA3 いずれの場合も、連合艦隊としては対馬海峡、津軽海峡の哨戒を厳とする(バルチック艦隊が必ず哨戒網に「引っかかる」)前提とし、その上での対抗分析を実施する。分析に当たっては、以下の諸元により海上自衛隊幹部学校の図演装置を活用し、シミュレーションを実施した。

バルチック艦隊の速力 10KT³⁵

連合艦隊の速力 15KT (12KT)³⁶

鎮海湾：ブサン沖

津軽海峡西口：松前沖 大島

中間点：能登半島沖(七ツ島)

津軽海峡東口³⁷：屋崎と恵山岬を結んだ線の間地点

実際 信濃丸発見報告位置(3320E12820E)／報告時間 0450

ア COA1：鎮海湾／ECO1：対馬海峡

会敵は十分に可能である。また、ウラジオストックまでの十分な距離を確保できることから、十分な追撃戦も実施できる。

イ COA1：鎮海湾／ECO2：津軽海峡

会敵は可能であるが、進出所要もあり会敵位置はウラジオストックまで90NM(30NM)の地点となり、殲滅までの空間は確保できない。

ウ COA1：鎮海湾／ECO3：兵力2分

会敵はできない。バルチック艦隊が対馬海峡と津軽海峡に出現した場合、連合艦隊として双方に対応するのは時間的にも空間的にも不可能である。

エ COA2：津軽海峡西口／ECO1：対馬海峡

会敵は可能である。会敵位置もウラジオストックまで290NM(220NM)の地点となり、ある程度の空間は確保できる。

オ COA2：津軽海峡西口／ECO2：津軽海峡

会敵は十分可能である。また、ウラジオストックまでの十分な距離を確保できることから、十分な追撃戦も実施できる。

³⁵ 各種資料から、バルチック艦隊の巡航速力は10KT程度と推定。

³⁶ 後述する小倉特務艦隊司令官に対する津軽方面への展開命令の中で、「速力十二海里以上の給炭船及び給水船を選定準備し置くへし」としており、燃料(石炭)も考慮して連合艦隊としての展開速力を12KT～15KTと推定。

³⁷ バルチック艦隊が津軽海峡を選択した場合、当時の哨戒計画から当該点で接敵する可能性が高いと考えられる。

カ COA2：津軽海峡西口／ECOA3：兵力 2 分

会敵はできない。バルチック艦隊が対馬海峡と津軽海峡に出現した場合、連合艦隊として双方に対応するのは時間的にも空間的にも不可能である。

キ COA3：中間点／ECOA1：対馬海峡

会敵は可能である。会敵位置もウラジオストックまで 420NM (375NM) の地点となり、ある程度の空間は確保できる。

ク COA3：中間点／ECOA2：津軽海峡

会敵は可能である。会敵位置もウラジオストックまで 305NM (240NM) の地点であり、ある程度の空間は確保できる。

ケ COA3：中間点／ECOA3：兵力 2 分

会敵は可能である。その場で状況判断を要する困難性はあるが、連合艦隊としても待機点から兵力を 2 分し、双方に対応するのは不可能ではない。

図 中間待機点と会敵点の位置関係



(出所) 筆者作成

(3)行動方針 (案) の比較

いずれの ECOA であっても、バルチック艦隊と会敵できるのは COA3 である。

COA1 は、バルチック艦隊としての MLCOA である ECOA1 を選択した場合、ウラジオストックまでの距離を最も長く確保できるという利点があるが、バルチック艦隊が津軽海峡や兵力 2 分を選択した場合、これに対応できない可能性も否定できない。

COA3 は、いかなる ECOA にも対応できるとともに、会敵後のウラジオストックまでの空間的スペースをある程度は確保できるという利点がある。

表 1 行動方針 (案) の比較

		鎮海湾待機	津軽海峡西口待機	中間点待機
会 敵	対馬海峡	◎	○	○
	津軽海峡	○	◎	○
	兵力 2 分	×	×	○
ウラジオストック までの空間	対馬海峡	◎	△	○
	津軽海峡	△	◎	○
	兵力 2 分	×	×	○

会敵凡例：◎：十分に可能 ○：可能
 ×：不可能
 空間凡例：◎：十分に確保
 ○：確保
 △：確保できるが不十分
 ×：確保できない

(出所) 筆者作成

(4)連合艦隊の待機点 — 考察結果

連合艦隊の待機点を中間点とする。

各 COA の利点、欠点は当然、当時の連合艦隊内でも議論されていたはずであるが、史実としては、利点、欠点を理解した上で、最大の不安と懸念を振り捨てて「敵は対馬海峡へ来る」と決し、それに基づく連合艦隊の鎮海湾待機であった³⁸。連合艦隊のみで対応する場合、MDCOA に対応できる選択肢は「中間点待機」のみの考察結果ではあるが、史実としては、連合艦隊は MDCOA ではなく、MLCOA として最も可能性のある対馬海峡

³⁸ 半藤一利『日本海軍の興亡』PHP 文庫、1999 年、97 頁。

を選択したものであり、MDCOAを捨てた判断が「賭博」と評価される所以であろう³⁹。

なお、「バルチック艦隊が選択する可能性がほぼない」と評価し、対抗させる敵の行動方針から除外した「宗谷海峡」ではあるが、連合艦隊に課せられた重みを踏まえれば、少しでも可能性がある「宗谷海峡」も一定程度考慮しておく必要がある。連合艦隊が中間点で待機した場合でも、バルチック艦隊が「宗谷海峡」を選択したとして前記シミュレーションをすれば、ウラジオストックまで273NM（221NM）の位置で会敵は可能である。

4 連合艦隊と軍令部の「意図」の相違

(1)連合艦隊 — 待機点変更の意図

MDCOAには対応できない選択肢を採用した連合艦隊には、当初から待機位置を津軽海峡方面に変更する考えがあった。

明治38年4月12日 東郷連合艦隊司令長官（以下、「東郷」）は伊東軍令部長に対し、「本職は敵艦隊今後の出現地の如何に依りては急に島前七尾、若しくは大湊に根拠地を移動するも計り難し」と報告しており、待機点の変更の可能性とともに、変更先として、連合艦隊は「隠岐」「七尾」「大湊」を想定していたと考えられる⁴⁰。

この後も、連合艦隊は軍令部に対し以下の報告を行っており、連合艦隊司令部内で鎮海湾待機か、北方への待機点変更か、の間に相当の議論検討がなされていたことを伺うことができる。

明治38年5月23日 午後2時15分

「相当の時期迄当方面に敵艦隊を見されは、敵は北海方面に迂回したるものと推断し、連合艦隊は十二海里以上の速力を以て大島（渡島）に移動せんとす」

明治38年5月25日 午後3時37分

³⁹ 伊藤『大海軍を想う』242頁。

⁴⁰ 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第2章 連合艦隊一般の行動」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C05110083400『極秘 明治37.8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』（防衛省防衛研究所）37頁。

「明二十六日正午迄敵影を見されは、連合艦隊は同日夕刻より北海方面に移動し、朝鮮海峡には、第七戦隊水雷艇隊四隊、仮装巡洋艦二隻、二三等仮装砲艦及び特務艦隊の残部を留め置く」⁴¹

また、東郷は明治38年5月24日の段階で既に、片岡第三艦隊司令長官に対しては「相当の時機迄当方面に敵艦隊を発見する能はざる時は、敵艦隊は北海方面に迂回したるものと推断し、連合艦隊は十二海里の速力を以て津軽海峡大島に直航す」と電訓し⁴²、小倉特務艦隊司令官に対しても「一相当の時期迄当方面に敵艦隊を見る能わさるときは連合艦隊は急速津軽海峡大島に移動せんとする予定なり 二 貴官は右の場合に於いて艦隊に随行し得る速力十二海里以上の給炭船及び給水船を選定準備し置くへし」と電訓しており⁴³、24日の時点では、連合艦隊は相当程度に待機点変更の意思を固めていたものと推察される。その意思を表したのが、以下の「密封命令」のくだりである。

然れとも彼は対馬、津軽、宗谷の何れの海峡を通過すへきやは固より確知する能はず、故に東郷連合艦隊司令長官は、経過の時日より推算し、相当の時機まで敵を見さるときは、北海方面に迂回したるものと判断し、連合艦隊も亦津軽方面に航して彼を遊撃せんとし、その意を伊東軍令部長に打電し、(略)加徳水道に在る第二艦隊司令長官以下各司令官を集めて軍議を凝し、隸下一般に左の密封命令を発し、指令を待ちて開封せしむ⁴⁴、

- 一 今に至る迄当方面に敵影を見ざるより敵艦隊は北海方面に迂回したるものと推断す
- 二 連合艦隊は会敵の目的を以て今より北海方面に移動せんとす
(略)

⁴¹ 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第1章 大本營の動作」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C05110083300『極秘 明治37. 8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』（防衛省防衛研究所）23-24頁。

⁴² 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第3章 朝鮮海峡方面の行動 付天山及び城津に陸兵発送」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C05110083500『極秘 明治37. 8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』（防衛省防衛研究所）140頁。

⁴³ 同上、220頁。

⁴⁴ 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第2章 連合艦隊一般の行動」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C05110083400『極秘 明治37. 8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』（防衛省防衛研究所）64頁。

(2)軍令部 — 待機点継続の意図

明治38年5月23日午後2時15分の連合艦隊からの報告を受け、大本営としては「敵艦隊の目的ウラジオストックに入るに在りとすれば、十中八九迄朝鮮海峡を通過すべく、之か為め、或は其の仮装巡洋艦を意外の方面に伴動せしむるか、若くは或時期に至らば、劣勢なる艦及び運送船の如きものを本隊より分離し、津軽、宗谷兩海峡中に向かはしめ、其の北海方面に現出する頃を測り、主力艦隊は反て朝鮮海峡の通過を試みる等の策に出つることあるへきを慮り」⁴⁵と、この段階でもバルチック艦隊は対馬海峡を選択すると考えていた。

このため伊東軍令部長は、明治38年5月25日午後1時40分、東郷に向かい、「敵をして万一我か虚に乘し、朝鮮海峡の通過を遂けしむることあらんや、即ち有形無形共に我か被るへき不利は、甚だ甚大なるものあるへきは言を俟たず、依て今後我か艦隊の主力を現位置より移動せらるることに就いては、特に慎重考慮せられんことを希望す」と発電しており⁴⁶、軍令部としては、連合艦隊には引き続き鎮海湾での待機を継続させたかったのである。

以上のやり取りの後、「明治38年5月26日午前0時5分 上海より、露国義勇艦隊三隻、運送船五隻、二十五日夕刻呉松に入港せりとの電報達し」「敵艦隊は二十五日夕刻迄は猶九州以南に在るものの如しと判断」、「東郷連合艦隊司令長官は猶新情報を得るまで移動を止むることに決し」「遂に二十七日敵艦隊朝鮮海峡に現出する」⁴⁷に至り、対馬海峡にバルチック艦隊が出現したのである。

5 軍令部の作戦構想 — 「意図」の相違が生じた原因

(1)リスク軽減策

「連合艦隊(司令長官)の使命」の中で述べた「リスク評価」は、軍令部にも共通のリスクであり、以下の2つであった。

ア バルチック艦隊が連合艦隊の待機点から離れた航路(海峡)を選択
影響度 大 蓋然性 中

⁴⁵ 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備/第1章 大本営の動作」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C05110083300『極秘 明治37.8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』(防衛省防衛研究所)24頁。

⁴⁶ 同上。

⁴⁷ 同上。

イ バルチック艦隊が兵力を分散 複数方面から日本海への進入を選択 影響度 大 蓋然性 大

軍令部としては、このリスクを軽減させる処置が必要であるが、バルチック艦隊が選択する可能性のある海峡が「対馬海峡」「津軽海峡」の2つ存在する中、用い得る艦隊が連合艦隊の1セットのみであれば、そのリスク軽減策は、バルチック艦隊の選択肢を1つとする、すなわち、いずれかの海峡の航行を不能にするか、それがなし得なければ、連合艦隊を双方に対応できる中間点に待機させておけばよい。そして、このリスク軽減策として軍令部が採用したのが、機雷による津軽海峡の閉塞であった。

(2)津軽海峡閉塞の経緯

上村第二艦隊司令長官は、明治37年12月30日「呉軍港に在る第二艦隊司令官海軍少将三須宗太郎をして、数隻の軍艦を率い急速津軽海峡に回航し、函館港或いは青森湾を根拠とし、ウラジオストック艦隊に対して、津軽海峡及び宗谷海峡の警備に任せしめたり」⁴⁸とし、日本海海戦以前から津軽海峡が、ウラジオストックのロシア艦隊に対する備えとして注目されていたことが伺える。

このような津軽海峡には、明治37年12月に津軽海峡防衛隊が発足し、函館に水雷艇が配備され、このあたりから、軍令部はバルチック艦隊の採り得る選択肢の一つとして津軽海峡に注目し、同艦隊が津軽海峡を選択した際には、機雷により津軽海峡を閉塞することが検討されていた。

明治38年4月18日「敵艦隊の津軽海峡通過の際には、特種水雷にて同海峡を閉塞し之を扼止することとなりたるを以て、十九日津軽海峡防禦司令部を設置」⁴⁹し、宮岡直記(大湊水雷団長・大佐)が司令官となり、同海峡方面の警備艦艇を指揮することになった。このとき宮岡の指揮下にあったのは、仮装巡洋艦「香港丸」「日本丸」、警備艦「武蔵」「豊橋」「韓崎丸」、それに第三、第四艇隊であり、警備艦「韓崎丸」は潜水艇母艦を兼ね、当

⁴⁸ 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第2章 連合艦隊一般の行動」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C05110083400『極秘 明治37.8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』(防衛省防衛研究所)27頁。

⁴⁹ 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備／第1章 大本營の動作」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C05110083300『極秘 明治37.8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』(防衛省防衛研究所)18頁。

時研究中だった「連係(繫)水雷」を実験しており、4月27日から、この方面に配備されていた⁵⁰。

この「韓崎丸」の派遣は大本営の直接の指示によるもので、後の「極秘・日露戦役参加者史談会記録」での軍令部参謀・財部彪大佐の証言によれば、西から東に流れる津軽海峡の潮流を利用して、バルチック艦隊が通過する時に連係水雷を投下し、行動の速度を遅らせることを目標としていた⁵¹。閉塞の目的については、明治38年5月20日 横須賀鎮守府司令長官から海軍大臣宛に報告された「津軽海峡水雷防御計画」に、「津軽海峡水雷防御の目的は一時海峡を閉塞して敵の通過を拒止するにあり」とも記載されている。

以上のことから、軍令部としてはバルチック艦隊が津軽海峡を選択する案を排除しておらず、明治38年4月18日には「特種水雷にて津軽海峡を閉塞」することを決定している。そして、バルチック艦隊が日本に接近している5月22日に伊東軍令部長は津軽海峡防備司令官に対し、「敵艦隊は二十四五日頃には、津軽海峡に北進し来ることあるものと覚悟し、臨機封敵の手段を講し置かれしことを望む」と訓令⁵²している。

軍令部は、バルチック艦隊の針路を対馬海峡とほぼ判断していたが、国運を決める重大事だから、万が一を考えて津軽海峡の防御をも準備していたのであり⁵³、MDCOAにも手を打っていたのである。

(3)軍令部の描いた作戦構想

軍令部としては、まずはMLCOAに連合艦隊を対応させ、MDCOAには津軽海峡を機雷で閉塞することにより備える。バルチック艦隊が兵力を2分した場合でも、対馬海峡方面は連合艦隊が対応し、津軽海峡方面は津軽海峡防衛隊で対応、万が一、津軽海峡を突破できた艦隊があったとしても、相応の被害を受けた艦隊であり、脚も遅くなっているため、対馬海峡方面の対応が終了した連合艦隊が一気に北上、これを追撃すれば残存部隊の殲滅も可能と見積もっていたと考えられる。つまり、機雷により津軽海峡を閉塞する目途が立ったことにより、軍令部の描いた作戦構想は、「連合艦隊は対馬方面に当たらせる。バルチック艦隊が津軽海峡を選択した場合は機

⁵⁰ 野村『日本海海戦の真実』74頁。

⁵¹ 同上。

⁵² 「第1編 露国増遣艦隊に対する作戦準備/第1章 大本営の動作」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.C05110083300『極秘 明治37.8年海戦史 第2部 戦紀 巻1』(防衛省防衛研究所)23頁。

⁵³ 野村『日本海海戦の真実』75頁。

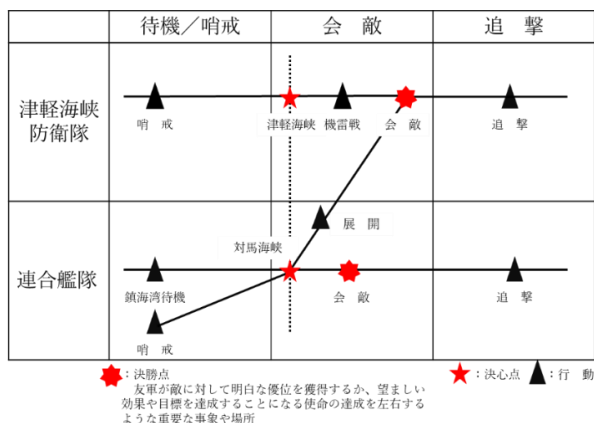
雷で対応、その後に津軽海峡の機雷群を抜けてくるバルチック艦隊の残存がいた場合は、待機点から連合艦隊を展開させ、これを殲滅する。」であったと推察される。

先に「COA1：鎮海湾／ECO2：津軽海峡」をシミュレーションし、会敵は可能であるが殲滅のための十分な空間的余裕が確保できない結果を得ているが、新たな情勢である「津軽海峡の機雷」を考慮すれば、シミュレーションした結果以上のウラジオストックまでの空間的余裕は確保できるようになる。であるならば、津軽海峡の備えができていいる以上、軍令部としては連合艦隊をウラジオストックまでの空間的余裕が最も長く確保できる鎮海湾に、可能な限り待機させておきたかったのではないかと推察される。

(4) 日本海軍の作戦系列⁵⁴

軍令部の作戦構想、すなわち日本海軍としての作戦構想を作戦系列として示すと、下図のようになり、対馬海峡と津軽海峡を俯瞰した作戦の態様になっていると理解できる。

表2 日本海軍の作戦系列（Line of Operation）



出所：筆者作成

⁵⁴ Lines of Operation (LOO)：目標達成に至る作戦の流れを、決勝点や結節となる点に対する作戦行動を時系列的に示したもの。

(5) 連合艦隊と軍令部の意図の相違が生じた原因

連合艦隊としては、MLCOAに対応して「鎮海湾」で待機していたものの、MDCOAの津軽海峡方面については全く手を打っておらず、これがために連合艦隊には自身が選択した待機点について相当不安があったと推察する。連合艦隊に課せられた「バルチック艦隊の殲滅」という重責、そして、それがなし得なかった場合、日本という国家そのものが消滅してしまうかもしれない程の影響を与えることになる重圧。いわば極限状態の中で行われた軍令部と連合艦隊との間でのやり取りは、まさに国家の命運を賭けたものであった。

では、なぜ軍令部と連合艦隊で「意図」に相違が生じたのか。それは、連合艦隊が津軽海峡の機雷による閉塞について何も知らされてなかったとされるからである。この情報が共有されていれば、津軽海峡は機雷で対応するので、連合艦隊としては対馬海峡に全力を当てればよい。仮に、バルチック艦隊が津軽海峡を選択したとしても、バルチック艦隊の艦船は機雷により相当程度に脚が遅くなっているはずであり、連合艦隊が鎮海湾から展開しても十分に間に合うという作戦構想を軍令部は有していた。しかしながら、この軍令部の作戦構想が連合艦隊には伝わっていなかったとされるのである。

この状況を、戸高一成は次のように描写している。

連合艦隊では、バルチック艦隊が五月二十六日までに発見できないときは、津軽海峡に迂回したものと判断して、北方に移動する密封命令書を準備していた。これを知った大本営の山下源太郎参謀は、この移動計画を思い止まるように電報を打とうとし、伊集院五郎軍令部次長を説得、五月二十三日夜更け、海軍大臣邸に山本権兵衛海軍大臣を訪れた。しかし、山本大臣は、「対露海軍の全部は東郷大将に任せてある。東郷は考えている。こんなことを言ったら、それを乱すことになる」と許可しなかった。ここで山下参謀は、「艦隊では、津軽海峡の乙雷を知りません」と説得、ようやく連合艦隊参謀あての意見なら良いとの大臣の同意を得て、電報で発せられたのは、二十四日であった。この乙雷とは、極秘の新兵器連繫機雷のことであり、すでに、津軽海峡は連繫機雷での封鎖の準備が整っていたのである⁵⁵。

⁵⁵ 戸高『日本海軍戦史』134頁。

このような重大な事柄が軍令部と連合艦隊の間で共有されていなかったことは、にわかには信じ難いが、確かに、『極秘 明治三十七八年海戦史』にも連合艦隊が津軽海峡の状況を共有していたとの記録を見つけることができない。

連合艦隊は、実質的な上級司令部である軍令部の作戦構想を理解していない中で、日本海海戦を戦っていたのではないか。であるならば、この点に、上級部隊と隷下部隊との間で作戦構想が共有されていなかったという大きな問題を見出すことができる。

5 教訓等

(1) 連合艦隊の視座から

MLCOAを選ぶのか、MDCOAを選ぶのか、は正に指揮官の考えであり、指揮官が「何に」重きを置くか、に関係してくる要素である。東郷は、指揮官としての経験と直感により「バルチック艦隊は対馬海峡を選択する⁵⁶」と判断し、MLCOAのみへの対応を決心していたとも考えられる。

津軽海峡の機雷による閉塞を知らなかった連合艦隊の視座で日本海海戦を振り返る場合、連合艦隊に課せられた使命は、これを達成しなければ日本という国家そのものが消滅しかねない程の重い使命である。そうであればこそ、連合艦隊としてはMLCOAに対応するにしても、MDCOAに対する「一手」を打っておく必要があったかもしれない。また、このMDCOAに対する一手が「中間点待機」の選択しかないのであれば、連合艦隊は中間点で待機しつつ、MLCOAが生起したならばこれに対応するように中間点から行動するという選択があったかもしれない。あるいは、連合艦隊自ら、津軽海峡の機雷による閉塞を軍令部に上申し、MDCOAに対する一手を主導的に「打つ」というやり方もあったのではないか。

(2) 軍令部の視座から

作戦計画立案に際しては、上級指揮官の指示や作戦構想を把握することが、隷下部隊として実施すべき第一であるが、連合艦隊は結果として軍令部の作戦構想を把握していなかった可能性も否定できない。そもそも、軍令部としても、自身の作戦構想をしっかり連合艦隊に伝えることが欠けていた可能性もある。作戦の中では、自身の行動方針は上級指揮官の使命達

⁵⁶ 野村『日本海海戦の真実』101頁。

成に寄与しているか否かを絶えず確認していくことが重要であり、自身の作戦目標も、上級指揮官の作戦目標に同期⁵⁷したものでなくてはならない。そして同期させるには、上級指揮官の作戦構想が共有されていることが必須である。軍令部としては、機雷による津軽海峡の閉塞の目途が立った時機が明治38年5月20日⁵⁸と、日本海海戦の正に直前であり、「帝国海軍第二期作戦方針」のような形式で方針を明示することが困難であったと推察するが、であるにせよ、何らかの形で津軽海峡の状況を連合艦隊とも共有しておく必要があった。

日本海海戦時にみられた軍令部と連合艦隊のやり取り、そして連合艦隊司令部内での議論をみるに、加えて、軍令部の作戦構想を理解していないとした連合艦隊が、バルチック艦隊の対馬海峡出現前に仮に待機点を変更していた場合の影響の大きさを想像すれば、改めて、作戦計画立案に際する上級指揮官との間での情報共有の重要性が理解できるのである。

(3) 総括

連合艦隊としては「確実に会敵」、その会敵位置は「バルチック艦隊と、ウラジオストックまでに十分な空間が確保し得る位置」であることが作戦成功の必須要件であることから、主として「機動」の観点から日本海海戦における連合艦隊の「待機点」について考察してきたが、津軽海峡の機雷による閉塞を知らなかったとした連合艦隊の視座で分析すれば、「一隻たりともウラジオストックに入港させない」「殲滅」という連合艦隊に課せられた重みの中でMDCOAを捨て、MLCOAの対馬海峡に「賭け」たとも言われる連合艦隊の判断の根拠については、今後も研究を継続していく必要がある。

一方で、津軽海峡の備えを実施していた軍令部の視座で分析すれば、ウラジオストックまでの距離が最も長く確保できる鎮海湾に連合艦隊を待機させておくことが最適の行動方針であったことに間違いはない。

本来いかなる視座からでも同じ評価になるところ、連合艦隊の視座か、軍令部の視座か、で待機点に係る考え方に違いが生じたのは、バルチック艦隊を如何に殲滅するか、に係る作戦構想が軍令部と連合艦隊の間で共有

⁵⁷ 決定的な場所と時期に最大の戦闘力を発揮できるように軍事行動と時間、空間、目的についてアレンジすること。全体の活動に合わせること。

⁵⁸ 横須賀鎮守府司令長官から海軍大臣宛に「津軽海峡水雷防御計画」が報告された期日。

されていなかったためであり、部隊間の情報共有の重要性を改めて認識させられるのである。

日本海海戦については、これまで連合艦隊のみの視座で分析される傾向にあったが、海軍作戦全体として俯瞰的に観ることにより、作戦に係るより精密な分析ができるものであり、この考えは、他作戦に係る分析時にも必要な考えであろう。

おわりに

明治38年5月22日 ロジェストヴェンスキー司令長官は、仮装巡洋艦「テレーク」「クバーニ」をして日本の東海岸方面に航行させた。もちろん、艦隊の対馬海峡通過を秘し、日本を牽制するための陽動作戦である⁵⁹が、我が商船にしろ、沿岸の漁民にしろ、こういう使命を持った「テレーク」「クバーニ」二艦を誰も発見しなかった⁶⁰。

明治38年5月25日 「仮装巡洋艦「リオン」、同「ヅネーブル」をして艦隊と離れ運送船「メテオル」、同「ウラチーミル」、同「ヤロスラーウリ」、同「ウオローネジ」、同「クセーニヤ」、同「リウオニヤ」を上海方面に護送」させたが、連合艦隊はこの情報を5月26日に入手し、バルチック艦隊が対馬海峡を選択したことを確信した。

「信濃丸」が濃霧の中でもいち早く敵を発見したのは、敵の病院船が赤十字の信号灯を掲げていたためである。たとえ病院船にしろ、敵艦隊に付属している以上は、ことに艦隊と一緒に潜行してウラジオストックに入ろうというのに、灯を点じて行くという法はない。それが何故信号灯を掲げていたか⁶¹。

「テレーク」「クバーニ」2艦の船影を少しでも確認していたら、鎮海湾での待機点を変更するか否かに係る連合艦隊の判断に大きな影響を与えたであろうし、運送船等が上海郊外の呉松に現れたという情報を連合艦隊が入手していなければ、連合艦隊はほぼ確実に津軽海峡に向かっていただろう⁶²。日本海海戦で日本海軍が主導的に対応できたのは、哨戒艦がバルチック艦隊を発見し、無線通信により情報を得たことにあるとされるが⁶³、

⁵⁹ 野村『海戦史に学ぶ』120頁。

⁶⁰ 秋山真之『天気晴朗ナレドモ波高シ』秋山真之会編、毎日ワンス、2009年、155頁。

⁶¹ 同上。

⁶² 野村『日本海海戦の真実』63頁。

⁶³ 『連合艦隊1905』イカロス出版、2011年、96頁。

病院船が灯火管制を徹底していれば、バルチック艦隊の発見が遅れ、その後の海戦にも影響を与えたのは確実である。

病院船の信号燈の件について、秋山自身、「敵としては非常な不覚である。そういう不覚を敵の誰も気づかなかったということは、これが天祐でなくて何であろう。」⁶⁴と述べており、海戦の公式報告書ともいべき戦闘詳報には「天祐と神助により」⁶⁵と書き出している。東郷も秋山も、日本海海戦の圧倒的勝利については、人事を尽くして天命を待つ、というだけでは割り切れないものを感じたのであろう⁶⁶。

連合艦隊は、日本海海戦において史上類をみない完全勝利を収め、現在でもその活躍は大いに称賛される。また、連合艦隊は、伊藤が評価した「賭博」⁶⁷に勝ったとも言える。

この点が、クラウゼヴィッツが「戦争はつとに客観的性質上賭であるのみならず、また主観的性質上からも賭である」⁶⁸「戦争には初めから可能性、蓋然性、幸不幸、といった賭け的性質が混入しているもの」⁶⁹と評する戦争の持つ賭的性質の証左であり、日本海海戦にも、戦争の持つ賭的性質の存在を感じざるを得ない。

なお、本稿は東郷が津軽海峡の機雷による閉塞を「知らなかった」仮定で論を進めたが、他方で、東郷が津軽海峡の機雷による閉塞を知っていたとすれば、東郷は津軽海峡を気にすることなく、当面は対馬海峡に集中しておけばよかったことになる。文学的に記述すれば、この安心感が、「坂の上の雲」で描写された『「バルチック艦隊がどの海峡を通過して来るとお思いですか」と島村に問われ、「それは対馬海峡よ!』と、言い切る東郷の自信につながったのかもしれない。

最後に、本稿作成の中心的資料となった『極秘 明治三十七八年海戦史』の成立経緯について以下に紹介する。

海軍軍令部は日清戦争の海戦史を戦後十年を費やして編纂、明治三十八年八月に、ようやく全四巻の「明治二十七八年海戦史」として刊行した。

⁶⁴ 秋山『天気晴朗ネレドモ波高シ』154頁。

⁶⁵ 「第1号 連合艦隊司令官海軍大将東郷平八郎の提出せる連合艦隊日本海海戦戦闘報告」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C05110085100『極秘 明治37.8年海戦史 第2部 戦紀 巻2 備考文書第1』(防衛省防衛研究所)7頁。

⁶⁶ 戸高『日本海軍戦史』156頁。

⁶⁷ 伊藤『大海軍を想う』242頁。

⁶⁸ クラウゼヴィッツ『戦争論(上)』清水多吉訳、中央文庫、2001年、59頁。

⁶⁹ 同上。

ちなみに軍令部は、このほか全二三巻の「極秘 明治二十七八年海戦史」を編纂しているが、その編纂日時は不明である。

この経験から、軍令部は日露戦争に際しても開戦前から周な計画を立て、戦史編纂の準備を進めていた。すなわち、戦時中から十分な資料を収集・整理し、戦争が終息して編纂時期が来たなら、一気にこれを完成させる意図を持っていた。この方針は効果を上げ、海軍軍令部は日露講和条約調印のわずか三か月後にあたる明治三十八年十二月から同四十四年までに、全百五十巻にも及ぶ『極秘 明治三十七八年海戦史』を完成させたのである⁷⁰。

『極秘 明治三十七八年海戦史』には否定的な評価⁷¹もあるが、日本海軍の教訓収集やその整理能力は大いに参考になるものであり、海上自衛官には一読を勧めるもとともに、日露戦争については、軍事と政治・外交の関係、海軍と陸軍の連係から、情報戦、科学技術、砲戦運動を含む海軍戦術に至るまで幅広い教訓を与え得る「教材」でもあり、大いに参考にするべきと付記する。

⁷⁰ 野村『日本海海戦の真実』20頁。

⁷¹ 「筆者が検証したところでは、極秘戦史に掲載されている戦策や戦闘報告には、手書き原本から活字にされる際に、都合の悪い記述が変更されたり削除されている箇所がある。」 出光英哉『丁字戦法の理論と実際—日本海海戦詳細研究 I』ブックコム、2014年、4頁。